



川崎医科大付属病院 開院50年

永井敦病院長に聞く

川崎医科大付属病院(倉敷市松島)は17日、開院から50年を迎えた。高度先進医療を提供し続けてきただけでなく、診療科の枠にとらわれず、症状を横断的に診る総合診療部の立ち上げ、ドクターヘリの運用といった先駆的な取り組みにも果敢に挑んできた。少子高齢化やAI(人工知能)の台頭など、医療を巡る環境が大きく変わる中、次の半世紀をどう描いていくか。永井敦病院長に歴史を振り返ってもらうとともに、将来展望を聞いた。(井上光悦)

「病院長として半世紀の歴史をどう感じていますか。」
1973年10月、開院に先立って病院の落成式が行われました。見学した医療関係者は広大な敷地に建つ大病院に驚きの声を上げたといいます。病室には酸素や吸引の配管があり、ベッドは岡山県内の病院では初めてとなる電動式。優れた医師を最高の場で養成したいと願う川崎祐宣初代理事長の思いが詰まった建物だったのではないのでしょうか。
その数年後、岡山大学医学部に入学した私は、バイクで倉敷方面に向かっている時、巨大な病院が目に見え込んできたのを今も鮮明に覚えています。地方に二つも大学病院があること自体が珍しく、岡山ってすごいなと思ったものです。その私が現在、病院長として舵取りを任ざられています。

患者第一主義これからも

日々感じるのは、地元の人々が頼りにしてくださっているということ。半世紀を一つの通過点として、これからも地域医療をしっかり支えていかねばと気持ちを引き締められています。
「患者第一主義」を病院運営の基本に据えています。
病院理念に基づくものです。「医療は患者のためにある」「すべての患者に対する深い人間愛を持つ」「24時間いつでも診療を行う」「先進的かつ高度な医療・教育・研究を行う」「地域の医療福祉の向上と医療人の育成を行う」の五つの理念は、私も病院長として大きな決断をしなければならぬ時、いつも読み返しています。

- 病院理念**
- 医療は患者のためにある
 - すべての患者に対する深い人間愛を持つ
 - 24時間いつでも診療を行う
 - 先進的かつ高度な医療・教育・研究を行う
 - 地域の医療福祉の向上と医療人の育成を行う

自らを奮い立たせています。
「理念を具現化した一つが救急分野の充実ですね。」
1976年、院内に救急部が立ち上がり、その1年後には人材育成や研究を目的に、全国初となる救急医学講座を川崎医科大に開設しました。「24時間いつでも診療を行う」という理念を形にしたものです。
さらに2001年にはわが国で最初となるドクターヘリの本格運用が始まりました。81年から実用化研究や試行を重ね、実現にこぎ着けました。運航エリアは岡山県内全域と近隣の一部で、これまでの出動件数は8千件を超えます。重症患者の救命や後遺症の軽減だけでなく、地域の医療格差の解消にもひと役買っています。
「病気だけでなく、その人を診る」という方針も開院以来大事にしてい

ます。
医学、医療の進歩に伴い、全国の大学病院では専門領域の細分化が進んでいます。しかも急速な高齢化、疾病構造の複雑化などを背景に、大学での医学教育も年々、専門化、高度化の度合いを強めて



「これからも患者第一主義を貫く」と覚悟を語る永井敦病院長 (中西弘之撮影)

医療の実践です。その場となる総合診療部を立ち上げたのは81年4月でした。日本の医療界に一石を投じる事例になったはずですが、総合診療のさらなる進化も考えているとお聞きしました。
来年3月、院内に「ファーストコンタクトセンター」を立ち上げたいと思っています。総合診療科を強化する目的で「紹介状なし」「予約なし」でも、当日必ず診療できる体制づくりを目指します。
病状によって、診察した医師が最適な診療科につなぐ役割も持たせます。「川崎に行けば安心」と思ってもらえるような機能的な外来にしたいと思っています。

「今後の運営方針は。」
50年かけて培ってきた地域の皆さんの信頼に、これからもこたえていく責務があります。少子高齢化が進むわが国は、社会保障費の削減などにより医療機関の経営は決して楽ではありません。人材面では医療の担い手不足が深刻な上、医師の働き方改革も来年4月に始まります。新型コロナウイルスのような新たな感染症への対応も待たないです。そうしたさまざまな困難が待ち構えています。AIやロボットといった最新の医療技術をいち早く取り入れながら、乗り越えていく覚悟です。
世の中の動きに柔軟に対応していく一方、時代がどんなに変わっても貫き通さなければならぬことがあります。それは五つの病院理念です。目先の対策ばかりにとらわれることなく、「かわらぬ思いをこの「さき」へ伝承していかねばなりません。」「かわる「さき」に向かって明確な目標を全職員と共有しながら、50年、100年先も、地域の人々に選ばれる病院づくりを目指していきます。」



川崎医科大や付属病院など川崎学園の全景。上は1979年、下は2020年撮影(川崎学園提供)

川崎医科大学付属病院 50年の歩み

川崎医科大学付属病院の主な歩み

1973年	12月	川崎医科大学付属病院開院(許可病床1052床)
79年	10月	救命救急センター開設
94年	3月	高度救命救急センター認可
	4月	特定機能病院承認
	11月	エイズ治療拠点病院指定
97年	1月	災害拠点病院(地域災害医療センター)指定
99年	10月	ドクターヘリ試行的事業開始
2000年	11月	許可病床数が1182床に(一般1154床、精神28床)。現在に至る
	12月	地域周産期母子医療センター指定
01年	4月	ドクターヘリ運用開始
02年	4月	新生児特定集中治療室(NICU)開設
	8月	西館棟しゅん工
06年	10月	岡山県高次脳機能障害支援普及事業支援拠点病院指定
07年	3月	エイズ治療中核拠点病院選定
	8月	がんセンター開設
	9月	臨床教育研修センター開設
	11月	臓器疾患・機能別センター外来開設
08年	2月	地域がん診療連携拠点病院指定
09年	3月	北館棟しゅん工
10年	1月	電子カルテシステム導入
	4月	おかやまDMAT(災害派遣医療チーム)指定機関に指定
12年	3月	岡山県認知症疾患医療センター指定
14年	6月	造血細胞移植センター開設
	8月	入退院サポートセンター開設
16年	4月	緩和ケアセンター開設
	7月	遺伝診療部開設(2023年1月～遺伝診療センター)
18年	3月	がんゲノム医療連携病院指定
	4月	遺伝性乳がん卵巣がん総合診療基幹施設認定
	6月	岡山県難病医療協力病院指定
20年	2月	がんゲノム医療センター開設
	8月	新型コロナウイルス感染症の重点医療機関指定
21年	3月	ハイブリッド手術室開設
22年	3月	ドクターヘリ格納庫しゅん工

開院50年を迎えた川崎医科大学付属病院。ドクターヘリの運航など、先駆的な取り組みを実践してきた



付属病院の建設計画を伝える1971年1月4日付の山陽新聞。「全国的にも有数の規模を誇る」と記されている



重症患者の治療に威力を発揮するドクターヘリ



総合診療部は1981年4月に開設された。病名のはっきりしない初診の患者を引き受け、最も最適な診療科に回す役割を担った



2021年開設のハイブリッド手術室。心・血管エックス線撮影装置を備え、血管内手術など高度な医療が提供できるようになった



救命救急センター(1979年10月開設)の当時の集中治療室

今回は来年1月15日付です。過去のメディカ掲載記事をはじめ、岡山県内主要病院の情報、医療・健康ニュースは山陽新聞社のホームページ「岡山の医

療健康ガイド MEDICA」(<https://medica.sanyonews.jp/>)でご覧いただけます。スマートフォンからはQRコードをご利用ください。

